

David B. Burrell : *Aquinas. God and Action.*

Routledge & Kegan Paul, London, 1979. pp. xiv+194

稲垣良典

著者バレル神父（米国ノートルダム大学，神学・哲学教授）はデイビッド・トレーシー、ルイ・デュプレ、マイクル・ノバクなどと並んで、最近の米国で最も話題にのぼることの多いカトリック思想家の一人である。基本的な哲学的立場に関してはカナダ出身のイエズス会神学者で、いわゆるトランスセンデンタル・トミズムの代表者の一人であるパーナード・ロナーガンの影響を最も強く受けているが、実存哲学、分析哲学、プロセス神学、深層心理学など、現代思想の諸相に活発な関心を寄せており、前著『類比と哲学的言語』（エール大学出版部、1973年）もかなりの論議を呼んだ。

『アクィナス——神と行為』という表題は「トマス哲学的神学の論理学・言語哲学的考察」と言い換えることができ、そのことによってトマス研究書としての本書の特色がうきばりにされるであろう。著書のトマス解釈はかれ自身ことわっているように「かなりラディカル」(p. 110) なものである。簡単にいうと、トマスが神の「存在」と「諸属性」をめぐって展開している議論は「神論」doctrine of Godではなく哲学的文法 philosophical grammar だ、というのが著者の主張である。著者自身の言いまわしにしたがうと、トマスがそこで従事しているのは「神的なることがらにふさわしい文法を立案すること」(p. 17)、「神をめぐる論述にとっての固有の論理を提示すること」(同)、「≪万物の始源にして終極≫に固有なる超越性のために論理的空間を確保すること」(p. 19)であり、神に関する一連の直接的な言明と思われるものは、じつは「神に関する論述にかかわる文法規定の整合的な組合せ」(p. 81)であって、「意図的に文法的な試論」(p. 41)にはかならない。トマスは言語を語るためだけでなく、語りえないことを示すために最大限に

使用しており、神をめぐる論述においては「論理学をぎりぎりまで追いつめて神の超越性をうかびあがらせようとする見事な戦略」(p. 116)が認められる、と著者は評する。

著者が語っているところによると、このようなトマス解釈のきっかけとなったのは、過去50年間の西欧(とくにイギリス)とアメリカにおける哲学的論述とトマスとの間に認められる「構造的パラレル(論理および言語にたいする鋭い注視によって特徴づけられた)」(序言)であった。じっさい「今世紀における哲学的分析に親しんだことで、(トマスとわれわれとの間の)この数世紀におけるトマスの最も好意的な注釈家たちすら達しえなかった、トマスの作用的諸前提についてのより優れた把握が可能になった」(pp. 36—37)というのである。この言葉は、かつてトマス研究者の一派が、現代における実存哲学者たちの仕事に刺激されて、トマスの古典的な注釈家や教科書著作家たちが看過してきた「エッセ」の重要性に気付くに至った、というトマス研究史の一こまをわれわれに想起させる。しかし、そこには重要な相違も認められるのであって、前記トミストたちがトマスの「エッセ」を独創的な形而上学の誕生として評価するのにたいして、パラレルはトマスの形而上学的洞察にたいしては消極的な態度をとり、むしろかれの論理学的明敏さに注目している。

本書はその表題(『神と行為』)が示しているように二部に分けられ、第一部では著者が「神をめぐる論述にとっての固有の論理、もしくは文法」と呼ぶものが分析され、第二部では「行為(現実態)」actus という類比的な名辞——著者はこれを主導的比喩 master metaphor と呼ぶ——の用法の分析を通じて、トマスの論理・文法の背後にある世界理解ないしは洞察をつきとめようとする試みがなされる。第一部がトマスの神論述の形式的な論理構造に注目しているのにたいして、第二部の主題はそこにおいて形式的な論理・文法が読みとられるべき、実質的な言語表現であるということができよう。さらに、第一部の分析において中心的な位置をしめる「エッセ」と、第二部において主導的な役割を果す「行為・現実態」との間には、密接な連関、あるいはむしろ何らかの同一性が認められる。そのことは、われわれがトマスにしたがってエッセを最高の現実態、エッセそのものを純粹現実態と解し、すべての行為・働きは(最高の現実態たる)エッセの因果性にほかならない、

という立場に立つとき、あきらかに見てとられるであろう。ここからして、本書の全体に統一を与えているのは、エッセと因果性とを統一的に捉えようとする著者の根本的立場である、と結論することができる。

それぞれの章における著者の議論を要約することは省略して、つぎにそれら議論のなかで注目に価いと思われるものをいくつか取りあげることしたい。

まず、トマスのいわゆる神論は神に関する教説 *doctrine of God* ではなく、われわれが神をめぐる行い論述の文法的構造についての反省を通じて、神的超越性を示そうとする哲学的文法である、という著者の主張について二、三のことをのべておこう。著者が「われわれは神についてその何であるかを知りえず、何でないかを知るにとどまるがゆえに、神についてはそのいかに在るかではなく、いかに在らぬかを考察しうるにとどまる」というトマスの言葉は、単なる修辞としてではなく、かれの根本的立場として真剣に受けとめ、解釈の基本に据えなければならぬ、と主張するのは正しい。しかし、そのことから神の単純性、完全性、無限性、一性、さらに神がエッセそのものであること、などについてのトマスの論述は何ら（第一原因についての）洞察をふくまず、ただ神についてわれわれは全く無知であることを示すための論理的、文法的な戦略である、と結論するのは性急ではなからうか。むしろトマスは第一原因についての洞察を言いあらわすために、ほとんど文法無視といえるほどの特異な言語表現に訴えざるをえなかった、と解釈すべきであろう。トマスが聖書の講解を主要な職務とする神学教授であったところから、人間の言語の多様で多層的な機能とその限界に深い関心を寄せざるをえなかったことは当然であるが、著者のようにトマスをもっぱら思弁的文法 *grammatica speculativa* ⁽¹⁾ の流れのなかに位置づけるのは強引に過ぎる。この点に関してパークの批評は適切であり、また著者はトマスの論述の背景としての哲学的文法のうちに、現代の言語理論の成果を読みこみすぎている、というジョーダンの批判も当たっていると思う。⁽²⁾

他方、著者がトマスの神についての論述のうちに、人間言語の多様で多層的な機能にたいする鋭敏な感覚と、それにもとづく巧妙な配慮を読みとっているのは正当であり、そのことはハーツホーン（プロセス神学者）およびユンクのトマス批判にたいする著者の有効な反論において示されている。すなわち、プロセス神学がトマ

スの神は世界から離在・超然たる神 aloof Godであり、福音において啓示された憐みの神とは違って無感動なる神 impassible Deity であると批判するのは、神をめぐる論述がそのまま神についての記述であるかのように誤解したからであり、トマス哲学の批判的性格を見落したからである (pp. 79—81)。たとえば、トマスが、神と被造物について語られる関係は、被造物の側からは実在的關係 *relatio realis* であるが、神の側からは実在的ではないと主張するのは、実在的關係を認めることで神のうちに何らかの複合を持ちこみ、創造を自然的過程ないし必然的流出と見なすことになる、という帰結を避けるためであって、愛による自由な創造の肯定と矛盾するのではない。むしろ実在的關係の否定を通じて創造の観念から自然的過程・必然的流出の要素が排除され、愛による自由な創造という神秘を受容するための障害が除去される (p. 87)。さらに、プロセス神学の説く神は福音によって靈感を与えられた神であり、福音書の説く神とより一致するかもしれないが、そのことは裏をかえせば福音書の神の代用品をつくりあげていることであり、イエスにおける神の啓示を不必要にするものではないか、という著者の指摘 (pp. 88—89) は問題の核心をついているように思われる。

つぎに、「善の欠如」という悪の定義にたいするユンクの批判は、この定義の「本質的に文法的な性格」の見落としによる、という著者の言いまわし (p. 90) には疑問を感じるが、トマスが「善の欠如」としての悪について語っているのは、ユンクが善と対立するものとしての悪について語っているのとは異なった言語のレベルにおいてである、という議論 (p. 96) には説得性がある。

著者は第一部の類比に関する章で、トマスは類比についての理論をのべていないだけでなく、そのような理論を明示的にも暗黙的にも使用して、ただ種々の異なった類比を様々の論点を確立するために使用しただけだ、と主張しているが (p. 55, 57)、第二部における「本質的に類比的な名辞」である「行為・現実態」の分析は、そうしたトマスの「類比」解釈を具体的に例示したものといえるであろう。ここで注目に値するのは、トマスの「行為」理解におけるパラダイムは認識および愛という志向的行為であって、ふつう因果性が問題になるときにパラダイムとしてとりあげられる物理的過程ではないという指摘 (p. 116, 131)、および、トマスにおいて行為の因果性は有効性とか (何らかの結果の) 達成にもとづいてではなく、

むしろ行為主体の現実態、すなわちエッセにもとづいて理解されている、との指摘（p. 117, 122, 132, 163）などであろう。こうした「行為」理解は、一見「行為」とは対立的な受容、非活動の状態と思われるものが最高の活動であるとのパラドックスを呼びおこすが、著者は最終章で殉教、観照的生活に関するトマスの論述、および東洋哲学における「行為」観などを素材にして、右の「行為」理解を説得的なものにしようと試みている。

本書は13世紀の「哲学的文法」についての詳細かつ正確な理解にもとづくものではなく、また神学者トマスを論理・言語分析哲学者に還元するきらいがある、などの点で、哲学的研究としては重大な難点をふくむといわなければならない。しかし、本書のうちにはこれまで閑却されがちであったトマスの神学・哲学の側面についての優れた洞察や卓抜な議論が数多く見出され、トマスを「見直す」試みへむけての第一歩としての役割をはたすことは間違いない。とりわけトマスの神学・哲学用語になじみの薄い現代哲学者にとっては貴重なトマス入門書の一つであるといえるであろう。

- (1) Vernon J. Bourke, *The New Scholasticism*, Vol. LIV, 1, 1980, pp. 109—111 における書評。
 (2) Mark Jordan, "Modes of Discourse in Aquinas' Metaphysics", *The New Scholasticism*, Vol. LIV, 4, 1980, pp. 401—402.

Werner Beierwaltes : *Identität und Differenz.*

Frankfurt am Main, Vittorio Klostermann, 1980. (Philosophische Abhandlungen, Band 49), 328 Seiten.

小田川方子

この書物は、現在西ドイツのフライブルク大学哲学科正教授であるバイアーヴェルテス氏の最新の著作であり、数年前に出され、当誌第17号、1975年に熊田陽一郎